

THE BROTHERHOOD

な か ま

第一章 人のつとめ

第一節 出家しゅっけの生活

一、わたしの弟子になろうとするものは、家を捨て世間を捨て財を捨てなければならぬ。教えのためにこれらすべてを捨てたものはわたしの相続者であり、*出家とよばれる。

たとえ、わたしの衣の裾すそをとって後ろに従い、わたしの足跡を踏んでいても、欲に心が乱れているならば、その人はわたしから遠い。たとえ、姿は出家であっても、彼は教えを見ていない。教えを見ない者はわたしを見ないからである。

たとえ、わたしから離れること何千里であつても、心が正しく静かであり、欲を離れているなら、彼はわたしのすぐそばにいる。なぜかという、彼は教えを見ており、教えを見る者はわたしを見るからである。

二、出家しゅつげの弟子は次の四つの条件を生活の基礎としなければならない。

一つには古布をつづり合わせた衣を用いなければならない。二つには托鉢たくはつによって食を得なければならぬ。三つには木の下、石の上を住みかとしなければならない。四つには牛の尿から作った薬ちんきやく（陳棄薬）のみを薬として用いなければならない。

食物を入れる容器を手にして戸こごとに食を乞うのは乞食こつじきの行ではあるが、それは他人に脅おびやかされたためでもなく、他人に誘われ欺あざむかれたためでもない。ただこの世のあらゆる苦しみを免れ、迷いを離れる道がここで教えられることを信じてなつたのである。

このように出家していながら、しかも欲を離れず、瞋いかりに心を乱され、五官を守ることができないとしたら、まことにふがいないことである。

三、自ら出家であると信じ、人に問われてもわたしは出家であると答える者は、次のように言うことができるに違いない。

「わたしは出家としてしなければならぬことは必ず守る。この出家のまことをもつ

て、わたしに施しをする人に、大きな幸いを得させ、同時に、わたし自身の出家しゅっけした目的を果たすようにしよう。」と。

さて、出家のしなければならぬこととは何であるか。慚ざんと愧きをそなえ、身と口と意ごころによる三つの行為と生活を清め、よく五官の戸口を守つて、享楽に心を奪われぬ。また、自分をたたえて他人をそしるということをせず、怠なまけて眠りにふけることがない。

夕方には静坐せいざや歩行をし、夜半には右わきを下に、足と足を重ね、起きるときのことをよく考えて静かに眠り、明け方にはまた静坐したり歩行したりする。

また日常生活においてもつねに正しい心でなければならぬ。静かなところを選んで座を占め、身と心とをまっすぐにし、貪むさぼり、瞋いかり、愚かさ、眠け、心の浮わつき、悔い、疑いを離れて心を清めなければならない。

このように心を統一して、すぐれた智慧ちえを起こし、煩惱ぼんのうを断ち切つて、ひたすらさとりに向かうのである。

四、もし出家しゅっけの身でありながら、貪むさほりを捨てず、瞋いかりを離れず、怨うらみ、そねみ、うぬぼれ、たぶらかし、といった過おほちを覆おほい隠おほすことをやめないなら、ちようど両刃もろぼの劍を衣いに包かんでいるようなものである。

衣いを着きているから出家しゅっけではなく、托鉢たくはつしているから出家しゅっけではなく、経きやうを誦よんでいるから出家しゅっけではなく、外形けいけいがただ出家しゅっけであるのみ、ただそれだけのことである。

形かたちがととのつても、煩惱ぼんのうをなくすことはできない。赤子あかごに衣いを着きせさせても出家しゅっけとよぶことはできない。

心を正ただしく統一いつせいし、智慧ちえを明あらかにし、煩惱ぼんのうをなくして、ひたすらさとりに向むかかう出家しゅっけ本来ほんらいの道みちを歩あく者ものでなければ、まことの出家しゅっけとはよばれない。

たとえ血ちは涸かれ、骨こつは碎くだけても、努力どりよくを加くえ、至いたるべきところへ至いたらなければならぬと決心けっしんし、努どりよくめ励むんだならば、ついには出家しゅっけの目的もくひくを果はたして、清きよらかな行ぎやういを成なしとげることができる。

五、出家しゅつげの道は、また、教えを伝えることである。すべての人びとに教えを説き、眠っている人の目を覚まさせ、邪見じゃけんな人の心を正しくし、身命しんみょうを惜しまず、広く教えをしなければならぬ。

しかし、この教えを説くということは容易でないから、教えを説くことを志す者は、みなほしげ仏の衣を着、仏の座すわに坐り、仏の室へやに入つて説かなければならぬ。

仏の衣を着るとは、柔和にゅうわであつて忍ぶ心を持つことである。仏の座に坐るとは、すべてのものをくう空と見て、執着しゅうじやくを持たないことである。仏の室に入るとは、すべての人に対して大慈悲だいじひの心を抱いだくことである。

六、またこの教えを説こうと思う者は、次の四つのことに心をとどめなければならない。第一にはその身の行いについて、第二にはそのことばについて、第三にはその願いについて、第四にはその大悲についてである。

第一に、教えを説く者は、忍耐の大地に住し、柔和であつて荒々しくなく、すべては

空であつて善悪のはからいを起こすべきものでもなく、また執着すべきものでもないと考え、ここに心のすわりを置いて、身の行いを柔らかにしなければならぬ。

第二には、さまざまな境遇の相手に心をくばつて、権勢ある者や邪悪な生活をする者に近づかないようにし、また異性に親しまない。静かなところにあつて心を修め、すべでは因縁によつて起こる道理を考へてこれを心のすわりとし、他人を侮らず、軽んぜず、他人の過ちを説かないようにしなければならぬ。

第三には、自分の心を安らかに保ち、仏に向かつては慈父の思ひをなし、道を修める人に対しては師の思ひをなし、すべての人びとに対しては大慈の思ひを起し、平等に教を説かなければならぬ。

第四には、仏と同様に慈悲の心を最大に發揮し、道を求めることを知らない人びとには、必ず教を聞くことができるようになってほしいと心に願ひ、その願ひに従つて努力しなければならぬ。

第二節 信者の道

一、仏教を信ずる者とは、三宝^{さんぼう}、すなわち、^{ほとけ}仏と教えと^{きょうだん}教団を信ずる者のことであるということは、すでに説いた。

だから、仏教を信ずる者は、仏と教えと教団に対して、破れることのない信を抱^{いだ}き、教えが命じている信者としての戒律を守らなければならない。

在家者^{ざいけしや}としての戒とは、ものの命を取らず、盗まず、よこしまな愛欲にふけらず、偽りを言わず、酒を飲まないことである。

在家者はこの三宝に対する信と、在家者としての戒を保つとともに、他人にもこの信と戒を得させるようにしなければならない。親戚^{しんせき}、友人、知人の間に同信の人をつくるように努めなければならない。そうすることによって彼らもまた仏の^{じひ}慈悲に浴することができる。

三宝さんぼうに対する信を持ち、在家ざいけとしての戒を守ることは、さとりを得るためであるから、在家の愛欲の生活の中にあつても、愛着に縛られないようにしなければならない。

父母ともついには別れなければならない。家族ともついには離れなければならない。この世もついには去らなければならない。別れなければならないもの、去らなければならないものに心を縛られず、別離というものがない涅槃ねはんに心を寄せなければならない。

二、仏ほとけの教えを聞いて、信が厚く、退くことがなければ、喜びは自然にわき起こる。この境地に入れば、何ごとにも光を認め、喜びを見いだしてゆくことができる。

その心は清く柔らかに、常に耐え忍んで、争いを好まず、人びとを悩まさず、仏と教えと教団を思うから、喜びは自然にわきいで、光はどこにでも見いだされる。

信ずることによって仏と一体になり、我がという思いを離れているから、わがものを貪むさばらず、したがって、生活に恐れがなく、そしられることをいとわない。

仏の国に生まれることを信じているから死を恐れぬ。教えの眞実と尊さを信じているから、人びとの前に出て、恐れることなく自分の信ずるところを言うことができる。また慈悲を心のもととするから、すべての人に対して好ききらいの思いがなく、心が正しく清らかであるから、進んであらゆる善を修める。

また順調の時も逆境のときも信仰を増し、恥を知り、教えを敬い、言つたとおりに行い、行ふとおりに言い、ことばと行いとが一致し、明らかな智慧をもつてものを見、心は山のように動かさず、ますますさとりの道に進むことを願う。

また、どんなできごとに出会つても、仏の心を心として人びとを導き、濁つた世の中にも、汚れた人びとの間にも交わつて、その人びとが善にうつるように尽くすのである。

三、だから、だれでもまず自ら教えを聞くことを願わなければならない。

だれかが「この燃え立つ火の中へ入れれば教えが得られる。」と言うなら、その火の中に入る覚悟を持たなければならない。

世界に満ちた火の中に分け入って仏の名を聞くことは、まことにその人の救いだからである。このようにして自ら教えを得て、広く施し、敬うべき人を敬い、仕えるべき人に仕え、深い慈悲の心をもつて他人に向かわなければならぬ。利己的であつたり、思うままにふるまうのは、道を行う人の行いではない。

このようにして教えを聞き、教えを信じ、他人をうらやまず、他人のことばに迷うことなく、自分のするしないについて省みることが肝心であり、他人のするしないを心にかけてはならない。何よりも自分の心を修めることが大切なのである。

仏を信じない人は、自分のことだけを思いわずらうから、心が狭く小さく、いつもこせこせと焦るのである。しかし、仏を信ずる人は、背後の力、背後の大悲を信ずるから、自然に心が広く大きくなり、焦らない。

四、また、教えを聞く人は、もとよりこの身を無常なものとし、苦しみの集まるものと見、悪の源と見るから、この身に執着しない。

しかしまた、この身を大切に養うことを怠おこたらない。それは楽しみを貪むさほるためではなく、道を得、道を伝えるためである。

この身を守らなければ命をまっとうすることができず、命をまっとうしなければ、教えを受けて身に行うことも、また教えを広く伝えることもできない。

河を渡ろうとする者はよく筏いかたを守り、旅をする人はよく馬を守るように、教えを聞く人はその身を大切に守らなければならない。

また仏ほとけを信ずる者は、着物を着るにも虚飾きよしよくのためにせず、ただ羞恥しゆうぢのためにし、寒さ暑さを防ぐためにしなければならない。

食物をとるにも楽しみのためにせず、身をささえ養って教えを受け、または説くためにしなければならない。

家に住むにも同じく、身のためにし、虚栄のためにしてはならない。さどりの家に住

み、^{ほんのう}煩惱の賊を防ぎ、誤った教えの風雨を避けるためと、思わなければならない。

すべてこのように、何ごとも身のためを思わず、他人に対してもおごる思いをせず、たださとりのため、教えのため、他人のためと思つてしなければならぬ。

だから、家にあつて家族と一緒にいても、その心はしばらくも教えを離れない。慈悲^{じひ}の心をもつて家族に従つてゐるが、手段を示して彼らに救いの道を教えるのである。

五、またこの仏教教団の在家者^{ざいけしや}には、日常、父母に仕え、家族に仕え、自分に仕え、^{ぼんしけ}仏に仕えるいろいろな心がけがある。

すなわち、父母に仕えるときには、一切を守り養つて、永く平和を得ようと思ひ、妻子と一緒にいるときには、愛着^{ろうごく}の牢獄から脱しなければならぬものと思わなければならぬ。

音楽を聞いているときには、教えの楽しみを得ようと思ひ、室^{へや}にいるときは、賢者の境地に入つて永く汚れを離れようと思わなければならない。

また、たまたま他人に施しをするときは、すべてを捨てて貪る心をなくそうと思い、集いの中にあるときには、諸仏の集いに入ろうと思ひ、災難にあつたときには、どんなことにも動揺しない心を得ようと願わなければならぬ。

また仏ほとけに帰依きえするときには、人びととともに大道を体得して、道を求める心を起こそうと願ひ、

教えに帰依しては、人びととともに深く教えの蔵に入つて、海のように大きい智慧ちえを得ようと願ひ、

教団に帰依しては、人びととともに大衆を導いて、すべての障害を除こうと願うがよい。

また、着物を着るなら、善根ぜんこんと慚愧ざんきを衣服とすることを忘れず、

大小便をするときは、心の貪りと瞋いかりと愚かさの汚れを除こうと願ひ、

高みに昇る道を見ては、無上の道へ昇つて迷いの世界を超えようと思ひ、低きに下る道を見ては、優しくへり下つて奥深い教えへ入ろうと願うがよい。

また、橋を見ては、教えの橋を作つて人を渡そうと願ひ、

なげき悲しむ人を見ては、うつり変わつて常なきものをなげく心を起こし、

欲を樂しむ人を見ては、幻の生活を離れてまことのさとりを得ようと願ひ、

おいしい食物を得ては、節約を知り、欲を少なくして執着しゅうじやくを離れようと願ひ、まずい食物を得ては、永く世間の欲を遠ざけようと願うがよい。

また夏の暑さの激しいときには、煩惱ぼんのうの熱を離れて涼しいさとの味わいを得たいと願ひ、冬の寒さの激しいときには、仏ほとけの大悲の温かさを願うがよい。

経を誦よむときには、すべての教えを保つて忘れないようにと願ひ、

仏を思つては、仏のようになすぐれた眼まなこを得たいと願ひ、

夜眠るときには、身と口と意こころのはたらきを休めて心を清めようと願ひ、朝目覚めては、すべてをさとつて、何ごとにも氣のつくようになろうと願うがよい。

六、また仏教を信ずる者は、すべてのもののありのままの姿、すなわち、「*空^{くう}」の教えを知っているから、世の中の仕事、人間の間のいろいろのことを軽視せず、そのまま受け入れ、それをそのままさとの道にかなうようにする。

人間の世界のことは迷いであって意味がなく、さとの世界のことは尊い、という二つに分けることなく、世間のすべてのできごとの中にさとの道を味わうようにする。

*^{むみやう}無明に覆^{おお}われた眼で見れば、世間は意味のない間違つたものとなるであろうが、^{ちえ}智慧をもつて明らかになぐめると、そのままがさとの世界になる。

ものに、意味のないものと意味のあるものとの二つがあるのでなく、善いものと悪いものとの二つがあるのでない。二つに分けるのは人のはからいである。

はからいを離れた智慧をもつて照らせば、すべてはみな尊い意味を持つものとなる。

七、仏教を信ずる者は、このようにして、^{ほとけ}仏を信じ、その信の心をもつて世の中のこと

とを尊く味わうが、またその心をもつて、身をへり下らせて他人に仕える。

だから、仏教を信ずる者にはおごる心がなく、へり下る心、他人に仕える心、大地のようにすべてを載せる心、すべてに仕えていとわない心、すべての苦しみを忍ぶ心、怠りのない心、すべての貧しい人びとに善根を施す心が起こる。

このように、人びとの貧しい心を哀れみ、すべての人びとの慈母となつてその心を育てようとする心は、そのまま、すべての人びとを父母のように敬い、自分の尊い善き師として崇める心である。

だから、仏教を信ずる者に対して、たとえ、百千の人びとが怨みを起こし、敵視し、害を加えようとしても、その心そのままになしとげることはできない。例えば、どのような毒でも、大海の水を汚し損なうことができないようなものである。

八、仏教を信ずる者は、また、省みておのれの幸せを喜び、この仏を信ずる心はまったく仏の力によるものであり、仏のたまものであると感謝する。

また煩惱ぼんのうの泥どろの中には、信仰心の種はないのであるが、この泥の中に仏ほとけの慈悲じひが植えつけられて、仏を信ずる心となつたことを、明らかに知る。

さきに説いたように、エーランダという毒樹の林に、チャンダナせんだん（梅檀）香木の芽が生えるはずはなく、煩惱の胸の中に、仏を信ずる種が芽生えるはずはない。

しかも、いま現に芽生えて歡喜かんぎの花が煩惱の胸の中に開くのは、その根はそこになく、別のところにあると知られるのである。その根は仏の胸の中にある。

仏を信ずる者も、我がの思いに立つときは、貪むさぼりと瞋いかりと愚かさの心から、他人をそねみ、ねたみ、にくみ、損そとなつたりする。しかし仏に帰ると、いまいうような大きな仏の仕事をするようになる。これはまことに、不可思議ふかしぎといわなければならぬ。

第三節 生活の指針

一、災いが内からわくことを知らず、東や西の方角から来るように思うのは愚かである。内を修めないで外を守ろうとするのは誤りである。

朝早く起き出て口をすすぎ、顔を洗い、東・西・南・北・上・下の六方を拜んで、災いの出口を守り、その日一日のしあわせを願うのは、世の人のなすところである。

しかし、^{ほとけ}仏の教えにおいては、これと異なり、正しい真理の六方に向かって尊敬を払い、賢明に徳を行って、災いを防ぐのである。

この六方を守るには、まず四つの行いの汚れを捨て、四つの悪い心を押しとどめ、家や財産を傾ける六つの門をふさがなければならぬ。

この四つの行いの汚れとは、殺生と盗みとよこしまな愛欲と偽りである。四つの悪い心とは、貪りと瞋りと愚かさ^{いなか}と恐れとである。家や財産を傾ける六つの門とは、酒を飲

んでふまじめになること、夜ふかしして遊びまわること、音楽や芝居におぼれること、賭事かけごとにふけること、悪い友だちと交わること、それに仕事を怠なまけることである。

この四つの行いの汚れを捨て、四つの悪い心を押しとどめ、家や財産を傾ける六つの門をふさいで、それからまことの六方を拝むのである。

このまことの六方とは何かというと、東方は親子の道、南方は師弟の道、西方は夫婦の道、北方は友人の道、下方は主従の道、そして、上方は教えを説く者に奉仕する道である。

まず、東方の親子の道とは、子は父母に対して五つのことをする。父母を養い、父母のために働き、家系を守り、家督を相続し、祖先に対して供物を捧げることである。

これに対して、親は子に五つのことをする。それは悪を遠ざけ、善をすすめ、知恵・技能を学ばせ、結婚させ、適当な時期に家督を譲ることである。互いにこの五つを守れば、東方の親子の道は平和であり、憂うれいがない。

次に南方の師弟の道とは、弟子は師に対し、座を立てて迎え、よく近くで仕え、熱心

に聴聞し、供養くようを怠おこたらず、慎つしんで教えを受ける。

それと同時に、師はまた弟子に対して、自ら身を正して指導し、自ら学び得たところをすべて正しく授け、よく会得したことを忘れないようにさせ、引き立てて名を表わすようにし、どこにあつても利益と尊敬が受けられるようにする。こうして南方の師弟の道は平和であり、憂うれいがない。

次に西方の夫婦の道とは、夫は妻に対し、尊敬と、礼節と、貞操とをもつて接し、権威をゆだね、装飾品を贈る。妻は夫に対し、すべての仕事をよく処理し、親族たちを適切に待遇し、貞操を保ち、家の財産を守り、家庭がうまくいくようにする。これによつて西方の夫婦の道は平和であり、憂うれいがない。

次に北方の友人の道とは、相手の足らないものを施し、優しいことばで語り、利益をはかり、常に相手を思いやり、正直に対処する。

また友人が悪い方に流れないように務め、万一そのような場合にはその財産を守つて

やり、また心配のあるときには相談相手になり、逆境のときは助けの手をのばし、必要な場合にはその家族を養うこともする。このようにして北方の友人の道は平和であり、^{うれ}憂いが無い。

次に下方の主従の道とは、主人は使用人に対して、次の五つを守る。その力に応じて仕事をさせる。よい食物と給与を与える。病気のときは親切に看病する。美味^{おい}しいものは分かち与える。適当な時に休養させる。

これに対して使用人は、主人に五つの心得をもって仕える。朝は主人よりも早く起き、夜は主人よりも遅く眠る。何ごとにも正直であり、仕事にはよく熟練する。そして主人の名誉を傷つけないよう心がける。こうして下方の主従の道は平和であり、憂いが無い。

次に上方の教えを説く者に奉仕する道とは、その教えを授ける師に対し、身も口も意^{こころ}もともに情^{なさ}けに満ち、丁寧^{ていねい}にその師を迎え、その教えを聴いて守り、供養することである。

これに対して、教えを説く者は、悪を遠ざけ、善をすすめ、善い心をもって慈^{いづく}しみ、

人の道を説き、よく教えを理解させ、人をして平安の境地に入らせるようにしなければならぬ。このようにして、上方の教えを説く者に奉仕する道は平和であり、憂うれいがない。

六方を拝むというのは、このように、六方の方角を拜んで災いを避けようとする事ではない。人としての六方を守って、内からわいてくる災いを、自ら防ぎとめることである。

二、人は親しむべき友と、親しむべきでない友とを、見分けなければならない。

親しむべきでない友とは、貪むさほりの深い人、ことばの巧みな人、へつらう人、浪費する人である。

親しむべき友とは、ほんとうに助けになる人、苦楽をともにする人、忠言を惜しまない人、同情心の深い人である。

ふまじめにならないよう注意を与え、陰に回って心配をし、災難にあつたときには慰め、必要なときに助力を惜しまず、秘密をあばかず、常に正しい方へ導いてくれる人は、

親しみ仕えるべき友である。

自らこのような友を得ることは容易ではないが、また、自分もこのような友になるように心がけなければならぬ。よい人は、その正しい行いゆえに、世間において、太陽のように輝く。

三、父母の大恩は、どのように努めても報いきれない。例えば百年の間、右の肩に父をのせ、左の肩に母をのせて歩いて、報いることはできない。

また、百年の間、日夜に香水で、父母の体を洗いさすり、あらゆる孝養を尽くしても、または父母を王者の位に昇らせるほどに、努め励んで、父母をして栄華を得させても、なおこの大恩に報いきることはできない。

しかし、もし父母を導いて仏ほとけの教えを信じさせ、誤った道を捨てて正しい道にかえらせ、貪りむさぼを捨てて施しを喜ぶようにすることができれば、はじめてその大恩に報いることができるのである。あるいはむしろ、それ以上であるとさえいえよう。

四、家庭は心と心をもっとも近く触れあつて住むところであるから、むつみあえば花園のように美しいが、もし心と心の調和を失うと、激しい波風を起こして、破滅をもたらすものである。

この場合、他人のことは言わず、まず自ら自分の心を守つてふむべき道を正しくふんでいなければならぬ。

五、昔、ひとりの信仰厚い青年がいた。父親が死んで、母親とともに親ひとり子ひとりの親しい生活を送っていたが、新たに嫁を迎えて三人の暮らしとなった。

初めは互いにむつみあい、平和な美しい家庭であつたが、ふとしたことしゅうとめから姑と嫁との心持ちに行き違いが起こり、波風が立ち始めると、容易には納まらず、ついに母は、若い二人を後に、家を離れることとなった。

母が別居すると、やがて若い嫁に男の子が生まれた。「姑と一緒にいる間は、口やかましいので、めでたいこともなかつたが、別居をすると、こうしてめでたいことができ

た。」と、嫁が言ったという噂が、さびしいひとり暮らしの姑の耳に入った。

姑は大変腹を立てて叫んだ。「世の中には正しいことがなくなった。母を追い出して、それでめでたいことがあるならば、世の中は逆さまだ。」

姑は、「この上は、正しさという主張を葬り去らなければ。」とわめき立て、気がふれたようになって、墓場へ出かけた。

このことを知ったインドラ神は、すぐに姑の前に現われて、ことの次第を尋ね、いろいろに諭したけれども、姑の心の角は折れない。

インドラ神はついに、「それではおまえの気のすむように、これから憎い嫁と孫を焼き殺してやろう。それでよいであろう。」と言った。

このインドラ神のことに驚いた姑は、自分の間違っていた心の罪をわびて、嫁と孫の助命を願った。息子も嫁もまたこのときには、いままでの心得違いを反省し、母を訪ねて、この墓場へ来る途中であった。インドラ神は姑と嫁とを和解させて、平和な家庭

にかえらせた。

自ら正しさを捨てなければ、教えは永久に滅びるものではない。教えがなくなるのは、教えそのものがなくなるのではなく、その人の心の正しさが失われるからである。

心と心の食い違いは、まことに恐ろしい不幸をもたらすものである。わずかの誤解も、ついには大きな災いとなる。家庭の生活において、このことは特に注意をしなければならぬ。

六、人はだれでもその家計のことについては、専心に蟻ありのように励み、蜜蜂みつばちのように努めなければならない。いたずらに他人の力をたのみ、その施しを待つてはならない。

また努め励んで得た富とみは、自分ひとりのものと考えて自分ひとりのために費してはならない。その幾分かは他人のためにこれを分かち、その幾分かはたくわえて不時の用にそなえ、また社会のため、教えのために用いられることを喜ばなければならない。

一つとして、「わがもの」というものはない。すべてはみな、ただいんねん因縁によって、自

分^{ぶん}にきたものであり、しばらく預^よかっているだけのことである。だから、一つのもので、大切^{たいせつ}にして粗末^{そまつ}にしてはならない。

七、アーナンダ（阿難^{あなん}）が、ウダヤナ王^{うだやな}の妃^き、シヤマヴァティーから、五百着^{ごひやくしやく}の衣^いを供養^{くよう}されたとき、アーナンダはこれを快く受け入れた。

王^{わう}はこれを聞いて、あるいはアーナンダ^{あなんだ}が貪^{むさぼ}りの心から受けたのではあるまいかと疑^{うたが}った。王^{わう}はアーナンダ^{あなんだ}を訪^まねて聞いた。

「尊者^{そんじ}は、五百着^{ごひやくしやく}の衣^いを一度^{いちど}に受^うけてどうしますか。」

アーナンダ^{あなんだ}は答^{こた}えた。「大王^{だいわう}よ、多くの比丘^{びきう}は破^{やぶ}れた衣^いを着^きているので、彼らにこの衣^いを分^わけてあげます。」「それでは破^{やぶ}れた衣^いはどうしますか。」「破^{やぶ}れた衣^いで敷布^{しきふ}を作りま^すす。」「古い敷布^{しきふ}は。」「枕^{まくら}の袋^{ふくろ}に。」「古い枕^{まくら}の袋^{ふくろ}は。」「床^{とこ}の敷物^{しきもの}に使^{つか}います。」「古い敷物^{しきもの}は。」「足^{あし}ふきを作りま^すす。」「古い足^{あし}ふきはどうしますか。」「雑巾^{ぞうきん}にしま^すす。」「古い雑巾^{ぞうきん}は。」「大王^{だいわう}よ、わたしどもはその雑巾^{ぞうきん}を細^{こま}かに裂^さき、泥^{どろ}に合^あわせて、家^{いへ}を造^{つく}るとき、壁^{かべ}

の中に入れます。」

ものは大切に使わなければならない。生かして使わなければならない。これが「わがもの」でない、預かりものの用い方である。

八、夫婦の道は、ただ都合によって一緒になつたのではなく、また肉体が一つ所に住むだけで果たされるものでもない。夫婦はともに、一つの教えによって心を養うようにしなければならぬ。

かつて夫婦の鏡とほめたたえられたある老夫婦は、世尊せそんのところおもむに赴いて、こう言つた。「世尊よ、わたしどもは幼少のときから互いに知りあい、夫婦になつたが、いままで心のどのすみにも、貞操のくもりを宿したことはない。この世において、このように夫婦として一生を過ごしたように、後の世にも、夫婦として相まみえることができるように教えて戴いたきたい。」

世尊は答えられた。「二人ともに信仰を同じくするがよい。一つの教えを受けて、同

じように心を養い、同じように施しをし、*智慧を同じくすれば、後の世にもまた、同じく一つの心で生きることができるのであろう。」

九、さとの道においては、男と女の区別はない。女も道を求める心を起こせば、「さとりを求める者」といわれる。

プラセーナジツト（波斯匿）王の王女、アヨーディヤー国王の妃、マツリカー（勝鬘）夫人は、このさとりを求める者であつて、深く世尊の教えに帰依し、世尊の前において、次の十の誓いを立てた。

「世尊よ、わたしは、今からさとりに至るまで、（一）受けた戒を犯しません。（二）目上の方々を侮りません。（三）あらゆる人びとに怒りを起こしません。（四）人の姿や形、持ち物に、ねたみ心を起こしません。（五）心の上にも、物の上にも、もの惜しみする心を起こしません。（六）自分のために財物をたくわえず、受けたものはみな貧しい人びとに与えて、幸せにしてあげます。（七）施しや、優しいことばや、他人に利益

を与える行いや、他人の身になって考えてあげることをしても、それを自分のためにせず、汚れなく、あくことなく、さまざまの心で、すべての人びとをおさめとりませぬ。(八)もし孤独のものや、牢獄ろうごくにつながれている者、または病に悩む者など、さまざまに苦しみにある人びとを見たならば、すぐに彼らを安らかにしてあげるために、道理を説き聞かせ、その苦しみを救ってあげます。(九)もし生きものを捕らえ、または飼ひ、あるいはさまざまな戒を犯す人を見たならば、わたしの力の続く限り、懲こらすべきは懲らし、諭さとすべきものは諭して、それらの悪い行いをやめさせます。(十)正しい教えを得ることを忘れません。正しい教えを忘れる者は、すべてにゆきわたるまことの教えから離れて、さとの岸にゆくことができませぬ。

わたしはまた、この不幸な人びとを哀あわれみ救うために、さらに三つの願いを立てます。(一)わたしはこのまことの願いをもって、あらゆる人びとを安らかにしてあげます。そして、その善根ぜんこんによって、どんな生を受けても、そこに正しい教えの智慧ちえを得るでありましょう。

(二)正しい教えの智慧を得たうえは、あくことなく、人びとに説いて聞かせます。

(三) 得たところの正しい教えは、体と命と財産を投げ捨てて、必ず守ります。」

家庭の真の意義は、相たずさえて道に進むところにある。この道に進む心を起こして、このマツリカー夫人ぶにんのように大きな願いを持つならば、まことに、すぐれた仏ほとけの弟子となるであろう。

第二章 仏国土の建設

第一節 むつみあうなかま

一、広い暗黒の野原がある。何の光もささない。そこには無数の生物がうようよしている。しかも暗黒のために互いに知ることがなく、めいめいひとりぼっちで、さびしきにおのきながらうごめいている。いかにも哀れあわな有様である。

そこへ急に光がさしてきた。すぐれた人が不意に現われ、手に大きなたいまつをふりかざしている。真暗闇まつくらやみの野原が一度に明るい野原となった。

すると、今まで闇をさぐ探つてうごめていた生物が立ち上がってあたりを見渡し、まわりに自分と同じものが沢山いることに気がつき、驚いて喜びの声をあげながら、互いに走り寄って抱きあい、にぎやかに語りあい喜びあった。

いまこの野原というのは人生、暗黒というのは正しい*智慧ちえの光のないことである。心に智慧の光のないものは、互いに会っても知りあい和合することを知らないために、独り生まれ独り死ぬ。ひとりぼっちである。ただ意味もなく動き回り、さびしさにおののくことは当然である。

「すぐれた人がたいまつをかかげて現われた。」とは、*仏ほとけが智慧の光をかざして、人生に向かったことである。

この光に照らされて、人びとは、はじめておのれを知ると同時に他人を見つけ、驚き喜んでここにはじめて和合の国が生まれる。

幾千万の人が住んでいても、互いに知りあうことがなければ、社会ではない。

社会とは、そこにまことの智慧が輝いて、互いに知りあい信じあつて、和合する団体のことである。

まことに、和合が社会や団体の生命であり、また真の意味である。

二、しかし、世の中には三とおりの団体がある。

一つは、権力や財力のそなわった指導者がいるために集まった団体、

二つは、ただ都合のために集まって、自分たちに都合よく争わなくてもよい間だけ続いている団体、

三つは、教えを中心として和合を生命とする団体である。

もとよりこの三種の団体のうち、まことの団体は第三の団体であつて、この団体は、一つの心を心として生活し、その中からいろいろの功德くどくを生んでくるから、そこには平和があり、喜びがあり、満足があり、幸福がある。

そして、ちようど山に降つた雨が流れて、谷川となり、次第に大河となつて、ついに大海に入るように、いろいろの境遇の人びとも、同じ教えの雨に潤されて、次第に小さな団体から社会へと流れあい、ついには同じ味のさとの海へと流れこむのである。

すべての心が水と乳とのように和合して、そこに美しい団体が生まれる。

だから正しい教えは、実にこの地上に、美しいまことの団体を作り出す根本の力であつて、それは先に言つたように、互いに見いだす光であるとともに、人びとの心の凹凸おとつを平らにして、和合させる力でもある。

このまことの団体は、このように教えを根本の力とするから、*教団といひ得る。

そしてすべての人は、みなその心をこの教えによつて養わなければならぬから、教団は道理としては、地上のあらゆる人間を含むが、事実としては、同信の人たちの団体である。

三、この事実としての団体は、教えを説いて在家ざいけに施すものと、これに対して衣食を施すものと、両者相まつて、教団を維持し拡張し、教えの久しく伝わるように努めなければならぬ。

それで、教団の人は和合を旨とし、その教団の使命を果たすように心がけなければならない。僧侶そうりよは在家を教え、在家は教えを受け教えを信じるのであり、したがつて両者に和合があり得るのである。

互いに和らぎむつみあつて争うことなく、同信の人とともに住む幸せを喜び、慈しみ交わり、人びとの心と一つになるように努めなければならない。

四、ここに教団和合の六つの原則がある。第一に、慈悲のことはを語り、第二に、慈悲の行いをなし、第三に、慈悲の意を守り、第四に、得たものは互いに分かちあい、第五に、同じ清らかな戒を保ち、第六に、互いに正しい見方を持つ。

このうち、正しい見方が中心となつて、他の五つを包むのである。

また次に、教団を榮えさせる二種の七原則がある。

(一) しばしば相集まつて教えを語りあい、

(二) 互いに相和して敬い、

(三) 教えをあげめ尊んで、みだりにこれをあらためず、

(四) 長幼相交わるとき礼をもつてし、

(五) 心を守って正直と敬い^{うやま}を旨とし、

(六) 閑かな^{しず}ところにあつて行いを清め、人を先にし、自分を後にして道に従い、

(七) 人びとを愛し、来るものを厚くもてなして、病めるものは大事に看護する。この七つを守れば教団は衰えない。

次に、(一) 清らかな心を守って雑事の多いのを願わず、

(二) 欲なきを守って貪^{むさぼ}らず、

(三) 忍辱^{にんじく}を守って争わず、

(四) 沈黙を守って言わず、

(五) 教えを守っておごらず、

(六) 一つの教えを守って他の教えに従わず、

(七) 儉約を守って衣食に質素であること。この七つを守れば教団は衰えない。

五、前にも言ったように、教団は和合を生命とするものであり、和合のない教団は教団ではないから、不和の生じないよう、生じた場合は、速やかにその不和を除き去るよう努めなければならない。

血は血によって清められるのではなく、恨みは恨みによって報いられるものではない。ただ恨みを忘れることによってなくすことができる。

六、昔、長災王ちやうさいおうという王があつた。隣国の兵を好むブラフマダッタ王に国を奪われ、妃と王子とともに隠れているうちに、敵に捕らえられたが、王子だけは幸いにして逃れることができた。

王が刑場の露と消える日、王子は父の命を救う機会をねらつたが、ついにその折もなく、無念に泣いて父の哀あはれな姿を見守つていた。

王は王子を見つけて、「長く見てはならない。短く急いではならない。恨みは恨みなきによってのみ静まるものである。」と、ひとり言のようにつぶやいた。

この後王子は、ただいぢらずに復讐ふくしゅうの道をたどった。機会を得て王家にやとわれ、王に接近してその信任を得るに至った。

ある日、王は獵に出たが、王子は今日こそ目的を果たさなければならぬと、ひそかにはかつて王を軍勢から引き離し、ただひとり王について山中を駆け回った。王はまったく疲れはてて、信任しているこの青年のひざをまくらに、しばしまどろんだ。

いまこそ時が来たと、王子は刀を抜いて王の首に当てたが、その刹那せつな父の臨終りんじゆうのことが思い出されて、いくたびか刺そうとしたが刺せずにいるうちに、突然王は目を覚まし、いま長災王ちやうさいおうの王子に首を刺されようとしている恐ろしい夢を見たと言う。

王子は王を押さえて刀を振りあげ、今こそ長年の恨みうらを晴らす時が来たと行って名をあげたが、またすぐ刀を捨てて王の前にひざまずいた。

王は長災王の臨終のことは聞いて大いに感動し、ここに互いに罪をわびて許しあい、王子にはもとの国を返すことになり、その後長く両国は親睦しんぼくを続けた。

ここに「長く見てはならない。」というのは、恨みを長く続かせるなどということである。「短く急いではならない。」というのは、友情を破るのに急ぐなどということである。

恨みはもとより恨みによって静まるものではなく、恨みを忘れることによつてのみ静まる。

和合の教団においては、終始この物語の精神を味わうことが必要である。

ひとり教団ばかりではない。世間の生活においても、このことはまた同様である。

第二節 仏の国

一、前に説いてきたように、*教団が和合を主として、その教えの宣布せんぷという使命を忘れないときには、教団は次第にその円周を大きくして、教えが広まってゆく。

ここに教えが広まるというのは、心を養い修める人が多くなつてゆくことであり、いまままでこの世の中を支配した*無明むみょうと愛欲むさぼの魔王が率いる貪りむさぼと瞋りいかと愚かさとの魔軍

が退いてここに^{*智慧と光明と信仰と}智慧と光明と信仰と^{かんぎ}歡喜とが、その支配権を握ることになる。

悪魔の領土は欲であり、闇であり、争いであり、剣であり、血であり、戦いである。そねみ、ねたみ、憎しみ、^{あざむ}欺き、へつらい、おもねり、隠し、そしてすることである。

いまそこに、^{ほしげ}智慧が輝き、^{じしひ}慈悲が潤い、信仰の根が張り、^{ほしげ}歡喜の花が開き、悪魔の領土は、一瞬にして^{ほしげ}仏の国になる。

さわやかなそよ風や、一輪の花が春の来たことを告げるように、ひとりがさとりを開けば、草木国土、山河大地、ことごとくみな仏の国となる。

なぜならば、心が清ければ、そのいるところもまた清いからである。

二、教えのしかれている世界では、人びとの心が素直になる。これはまことに、あくことのない大悲によって、常に人びとを照らし守るところの仏の心に触れて、汚れた心も清められるからである。

この素直な心は、同時に深い心、道にかなう心、施す心、戒を守る心、忍ぶ心、励む心、静かな心、智慧ちえの心、慈悲じひの心となり、また方便ほうべんをめぐらして、人びとに道を得させる心ともなるから、ここに仏ほとけの国が、立派にうち建てられる。

妻子とともにある家庭も、立派に仏の宿る家庭となり、社会的差別の免れない国家でも、仏の治める心の王国となる。

まことに、欲にまみれた人によって建てられた御殿が仏の住所ではない。月の光が漏れこむような粗末な小屋も、素直な心の人を主あるじとすれば、仏の宿る場所となる。

ひとりの心の上にうち建てられた仏の国は、同信の人を呼んでその数を加えてゆく。家庭に村に町に都市に国に、最後には世界に、次第に広がってゆく。

まことに、教えを広めてゆくことは、この仏の国を広げてゆくことにほかならない。

三、まことにこの世界は、一方から見れば、悪魔の領土であり、欲の世界であり、血の戦いの場ではあるが、この世界において、仏のさとりを信じる者は、この世を汚す血

を乳とし、欲を慈に代え、この世を悪魔の手から奪い取って、仏の国となそうとする。

一つの柄杓を取って、大海の水を汲み尽くそうとすることは、容易ではない。しかし、生まれ変わり死に変わり、必ずこの仕事を成しとげようとするのが、仏を信ずるものの心の願いである。

仏は彼岸に立つて待っている。彼岸はさとりの世界であって、永久に、貪りと瞋りと愚かさど苦しみと悩みとのない国である。そこには智慧の光だけが輝き、慈悲の雨だけが、しとしとと潤している。

この世にあつて、悩む者、苦しむ者、悲しむ者、または、教えの宣布に疲れた者が、ことごとく入って憩い休らうところの国である。

この国は、光の尽きることのない、命の終わることのない、ふたたび迷いに帰ることのない仏の国である。

まことにこの国は、さとりの楽しみが満ちみち、花の光は智慧をたたえ、鳥のさえずり

も教えを説く国である。まことにすべての人びとが最後に帰ってゆくべきところである。

四、しかし、この国は休息のところではあるが、安逸あんいつのところではない。その花の台うてなは、いたずらに安楽に眠る場所ではない。真に働く力を得て、それをたくわえておくところの場所である。

ほとけ 仏の仕事は、永遠に終わることを知らない。人のある限り、生物の続く限り、また、それぞれの生物の心がそれぞれの世界を作り出している限り、そのやむときはついにない。いま仏の力によって彼岸ひがんの浄土に入った仏の子らは、再びそれぞれ縁ある世界に帰って、仏の仕事に参加する。

一つの灯ともしびがともると、次々に他の灯に火が移されて、尽きるところがないように、仏の心の灯も、人びとの灯に次から次へと火を点じて、永遠にその終わるところを知らないであろう。

仏の子らも、またこの仏の仕事を受け持つて、人びとの心を成就じょうじゆし、仏の国を美しく飾るため、永遠に働いてやまないのである。

第三節 仏の国をささえるもの

一、ウダヤナ王の妃^{ひめ}シヤマヴァアティーは、あつく世尊^{せそん}に帰依^{きえ}していた。

妃は王宮の奥深くにいて外出しなかった。侍女^{じじよ}のウッタラーは、記憶力がよくて、いつも世尊の法座につらなり、教えを受けて世尊のことばのとおりを妃に伝え、これによって、妃の信仰は、いよいよその深さを増したのであった。

第二の妃、マーガンディヤは、シヤマヴァアティーをねたんでこれを殺そうと企て、ウダヤナ王にいろいろ中傷した。ついに心を動かした王は、シヤマヴァアティーを殺そうとした。

そのときシヤマヴァアティーは、従容^{しゅうよう}として王の前に立ったが、王は妃の慈悲^{じひ}に満ちた姿に打たれて矢を放つこともできず、ついに心が解けて、妃にその粗暴なふるまいをわびた。

マーガンディヤは、いっそうの怒りを増して、ついに王の留守の間に、悪者と謀^{はか}つてシヤマヴァアティーの奥殿に火を放った。妃はあわて騒ぐ侍女たちを教え励まして、驚き

も恐れもせず、世尊せそんの教えに生きながら従容しじょうようとして道じゆんに殉じた。ウツタラーもまた、火の中で死んだ。

シヤマヴァティーは、在家ざいけの信女しんによのうち慈心第一、ウツタラーは多聞たもん第一とたたえられた。

二、釈迦族の王、マハーナーマは世尊のいところであるが、世尊の教えを信ずる心が至つてあつく、誠を尽くして帰依きえする信者であつた。

コーサラ国の凶悪な王、ヴァイルーダカ王が釈迦族を攻め滅ぼしたとき、マハーナーマは出ていつて王に会い、城民を救いたいと願つたが、凶悪な王が容易に許さないのを知つて、せめて自分が池の中に沈んでいる間だけ、門を開いて自由に城民を逃げさせてほしいと頼んだ。

王は、人間の水中に沈んでいる間だけのことなら、わずかな時間であるからと考えて、これを許した。

マハーナーマは池に沈み、城門は開かれ、人びとは喜んで逃げのびた。しかし、いつまでもたつてもマハーナーマは浮かび上がらなかつた。彼は池に入つて髪を解き、柳の根

に結びつけ、自らを殺して人びとを救ったのであった。

三、ウトパラヴァアルナー（蓮華色）は神通第一の比丘尼であつて、マウドガルヤーヤナ（目連）に比べられる人であり、多くの比丘尼を引き連れて常に教化し、比丘尼の中のすぐれた指導者のひとりであつた。

デーヴァダッタ（提婆達多）がアジャータシヤトル（阿闍世）王をそそのかして、世尊に対して反逆を企てたが、後、王が世尊に帰依してデーヴァダッタを顧みないようになり、城門に至つたがさえぎられて入ることができず、門前にたたずんでいたとき、おりから門を出てくるウトパラヴァアルナーを見て、にわかには怒り出し、その大力にまかせてこぶしをあげて頭を打つた。

ウトパラヴァアルナーは痛みを忍んで僧坊に帰つたが、弟子たちの驚き悲しむのを慰めて「姉妹よ、人の命ははかられない。ものみなすべて無常であり、無我である。さとの世界ばかりが、静かであつて頼るべきところである。努め励んで道を修めるように。」と教え、静かに死についた。

四、かつて殺人鬼として、多くの人びとの命をあやめ、世尊せそんに救われて仏弟子となつたアングリマールヤ(指鬘しゅまん)は、その出家しゅっけ以前の罪のために、托鉢たくはつの途上で、人びとの迫害を受けた。

ある日、町に入って托鉢し、恨みのある人びとに傷つけられて、全身血にまみれながら、やっと僧坊に帰つて、世尊の足を拜して喜びのことばをのべた。

「世尊、わたくしはもと、無害という名でありながら、愚かさのために、多くの人の命を損そこない、洗えども清まらない血の指を集めたために、指鬘の名を得ましたが、いまでは三宝さんぼうに帰依きえしてさとの智慧ちえを得ました。馬や牛を御ごするには、むちや綱なわを用いますが、世尊は、むちも綱もかぎも用いずに、わたくしの心をととのえて下さいました。今日わたくしは、わたくしの受けるべき報むくいを受けました。生も願わず死も待たずに、静かに時の至るのを待ちます。」

五、マウドガルヤーヤナ(目連もくれん)はシャーリプトラ(舍利弗しゃりほつ)と並び称せられた世尊の二大弟子のひとりであった。世尊の教えが水のように人びとの心に浸みこむのを見て、

異教の人びとがねたみを起こし、いろいろな妨げをした。

しかし、どんな妨げも、まことの教えの広まってゆくのをとめることはできないで、異教の人びとは、世尊せそんの手足をもぎ取ろうとして、目連もくれんをねらった。

一度ならず二度までも、その人びとの襲撃を避け得た目連も、ついに三度めに大勢の異教者に取りまかれて、その迫害を受けることとなった。

目連は、骨も砕くだけ肉もただれ、暴逆の限りを静かに受け忍んで、さとり的心に何のたじろぎもなく、平和な心で死についた。

増支部

比丘たちよ、一人の人のこの世に生まるるは、多くの人の利益のため、多くの人の幸せのため、又、世間をあわれむがため、人と天との利益と幸せのために生まるるなり。その一人の人はたれぞ。これ如来、応供、正等覚なり。比丘たちよ、これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世に現わるるは、難きことなり。その一人の人はたれぞ。これ如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、この世に見ること難きは、一人の希有の人のこの世に生まるることなり。その一人の人はたれぞ。如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世を去りて、多くの人の愁い嘆くことあり。その一人の人とはたれぞ。如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世に生まるとは、比ぶべきものなき人の生まるるなり。その一人の人とはたれぞ。これ如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世にいづるは、大いなる眼、大いなる明り、大いなる光の現わるるなり。その一人の人とはたれぞ。これ如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

(増支部一―二三)

各章節の典拠（よりどころ）

五、維摩經、入不二品……………	六四	一	頁	行
六、華嚴經第三十四、入法界品……………	六六	二		
七、楞伽經等……………	六六	五		
第三章				
第一節				
一、パーリ、律藏大品一一五……………	六八	一		
一、パーリ、律藏小品五十二十一……………	六九	三		
二、首楞嚴經……………	六九	七		
第二節				
一、首楞嚴經……………	七四	七		
三、大般涅槃經……………	七六	五		
四、法華經第七、化城喻品及び 首楞嚴經……………	七六	八		
四、華嚴經第三十二、如來性起品……………	七七	四		
四、大般涅槃經……………	七七	六		
五、梵網經……………	七七	九		
六、大般涅槃經……………	七八	二		
第四章				
第一節				
一、勝鬘經……………	八四	一		
二、パーリ、増支部二十一……………	八五	五		
二、パーリ、本事經九十三……………	八五	九		
二、パーリ、律藏大品……………	八五	一二		
三、パーリ、増支部三一六十八……………	八六	五		
四、パーリ、増支部三一三十四……………	八七	一		
五、方廣大莊嚴經……………	八七	九		
五、パーリ、律藏大品一一六、 轉法輪經……………	八八	一		
五、パーリ、中部二一十四、 苦蘊小經……………	八八	三		
六、大般涅槃經……………	八八	九		
七、パーリ、本事經二十四……………	八九	九		
一、大般涅槃經……………	七九	一	頁	行
第二節				

頁 行

第二節

一、パーリ、中部五十一、

カンダラカ経……………

九一 五

二、パーリ、増支部三一―百三十……………

九二 三

二、パーリ、増支部三一―百十三……………

九二 一二

第三節

一、パーリ、本事経百……………

九三 七

一、譬喩経……………

九四 三

二、大般涅槃経……………

九五 二

三、パーリ、増支部三一―六十二……………

九六 八

四、パーリ、増支部三一―三十五……………

九七 五

五、パーリ、長老尼偈註……………

九八 七

第四節

一、無量寿経下卷……………

九九 九

第五章

第一節

一、無量寿経上卷……………

一〇六

三、無量寿経下卷……………

一一〇

頁 行

四、觀無量寿経……………

一一一 七

第二節

一、阿弥陀経……………

一一四 八

「はげみ」

第一章

第一節

一、パーリ、中部二、一切漏経……………

一二〇 一

二、パーリ、中部二十六、

聖求経…………… 一二一 一〇

三、パーリ、相應部

三十五―二百六…………… 一二二 五

四、四十二章経……………

一二三 七

七、パーリ、中部十九、雙考経……………

一二六 一

八、パーリ、法句経註…………… 一二六 二

第二節

一、パーリ、増支部三一―百十七……………

一二八 一

二、パーリ、中部三一―二十一、

鋸喩經……………	一二八	頁
五、パリー、中部三一二十三、		
蟻塚經……………	一三二	三
六、パリー、本生經四―四百九十七、		
マータンガ・ジャータカ……………	一三三	一〇
八、四十二章經……………	一三七	五
九、四十二章經……………	一三七	一〇
十、四十二章經……………	一三八	七
十一、パリー、増支部二―四……………	一四〇	一
第三節		
一、雜寶藏經……………	一四〇	九
五、百喩經……………	一四六	一二
十、大智度論……………	一五〇	一二
十一、大般涅槃經……………	一五二	八
十二、雜寶藏經……………	一五三	九
第二章		
第一節		
一、パリー、中部七―六十三、		

箭喩經……………	一五八	頁
二、パリー、中部三一二十九、		
大樹心喩經……………	一六〇	六
三、仏昇忉利天為母說法經……………	一六一	一〇
四、パリー、長老偈註……………	一六二	四
五、パリー、中部三一二十八、		
大象跡喩經……………	一六四	六
五、大般涅槃經……………	一六五	二
六、百緣經……………	一六五	一〇
七、大般涅槃經……………	一六七	七
八、小品般若波羅蜜經第八十八、		
常啼品……………	一七〇	一
九、華嚴經第三十四、入法界品……………	一七一	四
第二節		
一、パリー、増支部三一八十八……………	一七三	四
一、パリー、増支部三一八十一……………	一七四	二
一、パリー、増支部三一八十二……………	一七四	六
二、般泥洹經上卷……………	一七五	一
三、パリー、中部十四―百四十一、		

分別聖諦經……………	一七五	一	二、パリー、増支部五十三二……………	一八七	九
四、般泥洹經上卷……………	一七六	二	二、維摩經……………	一八七	二
六、パリー、増支部五十六……………	一七七	一	二、首楞嚴經……………	一八八	七
七、華嚴經第六、明難品……………	一七八	六	三、無量壽經下卷……………	一八八	一〇
七、大般涅槃經……………	一七九	一	四、パリー、相應部一四一六……………	一八九	四
七、雜寶藏經……………	一七九	八	四、華嚴經第三十三、離世間品……………	一八九	五
八、金光明經第二十六、捨身品……………	一八〇	五	五、華嚴經第二十四、十忍品……………	一九〇	二
九、大般涅槃經……………	一八一	一	五、金光明經第四、金鼓品……………	一九〇	七
十、パリー、長老偈註……………	一八二	一	五、觀無量壽經……………	一九〇	一一
十一、パリー、本生經五十五……………	一八二	二	五、無量壽經……………	一九一	一
十二、パリー、本事經三十九・四十……………	一八四	五	六、大般涅槃經……………	一九一	四
十二、大般涅槃經……………	一八四	九	七、パリー、中部二十一六、		
十二、大般涅槃經……………	一八四	一	心荒野經……………	一九二	四
十二、パリー、増支部五十二……………	一八五	一	七、無量壽經下卷……………	一九三	三
十三、般泥洹經……………	一八五	四	第 四 節		
十三、首楞嚴經……………	一八五	九	一、法句經……………	一九四	一
第 三 節			七、パリー、相應部一四一六……………	二〇二	四
一、パリー、相應部五十五―二十一			七、増一阿含經……………	二〇二	一〇
・二十二……………	一八六	一〇	七、大般涅槃經……………	二〇二	一一

「なかま」

頁 行

第一章

第一節

頁 行

一、パリー、本事經百・中部

一―三、法嗣經……………二〇四 一

一、パリー、本事經九十二……………二〇四 三

二、パリー、律藏大品一―三十……………二〇五 一

三、パリー、中部四―三十九、

馬邑大經……………二〇五 一〇

四、パリー、中部四―四十、

馬邑小經……………二〇七 一

五、法華經第十、法師品……………二〇八 一

五、法華經第十、法師品……………二〇八 四

六、法華經第十四、安樂行品……………二〇八 九

第二節

一、パリー、相應部

五十五―三十七……………二一〇 一

一、パリー、増支部三―七十五……………二一〇 七

一、パリー、相應部

五十五―三十七……………二一一 一

一、パリー、相應部

五十五―五十四……………二一一 三

二、華嚴經第二十二、十地品……………二一一 六

三、大般涅槃經……………二一二 一〇

五、華嚴經第七、淨行品……………二一五 六

六、仏昇切利天為母說法經……………二一八 一

七、華嚴經第二十一、

金剛幢菩薩十廻向品……………二一八 一一

八、大般涅槃經……………二一九 一一

第三節

一、六方礼經……………二二二 一

三、パリー、増支部二―四……………二二六 五

四、パリー、増支部三―三十一……………二二七 一

五、パリー、本生經四百十七、

迦旃延本生……………二二七 六

六、六方礼經……………二二九 七

六、法句譬喻經四……………二二九 一二

八、ビルマ仏伝……………	二三一	頁	行
九、勝鬘經……………	二三二	三	四
第二章			
第一節			
一、大般涅槃經……………	二三五	一	一
二、パーリ、増支部三―百十八……………	二三七	一	一
三、パーリ、相應部……………	二三八	八	一
四、パーリ、律藏大品、			
十一―一二……………	二三九	三	七
四、長阿含經第二、遊行經……………	二三九	七	三
五、パーリ、律藏大品、			
十一―一二……………	二四一	一	七
第二節			
一、パーリ、相應部……………	二四三	八	一
一、中陰經……………	二四四	六	一
二、維摩經……………	二四四	九	一
三、大般涅槃經……………	二四五	一	一
三、阿弥陀經……………	二四六	一〇	一
四、無量壽經……………	二四七	二	一

四、維摩經……………	二四七	頁	行
第三節			
一、パーリ、法句經註……………	二四八	一	一
一、増一阿含經三十四―二……………	二四八	五	一
二、パーリ、法句經註……………	二四九	四	一
三、増一阿含經五―一……………	二五〇	二	一
三、根本有部律破僧事十……………	二五〇	五	一
四、鶡掘摩經……………	二五一	一	一
五、増一阿含經二十六……………	二五一	二	一